

【コラム】 ゴミは宝物

廃掃法とか容器包装リサイクル法とか、そのむかし法制化を進める仕事をした仲間が集まって花見の時期に旧交を温めることとした。

窓越しに桜をめぐることができる良い場所であった。一人遅れていたが時間となり乾杯が進んでしまった。挨拶が始まってしばらくすると遅れていた一人があたふたと入ってきた。挨拶は中断されてしまった。

「5分のところを1時間もかかってしまった。あーあー」と大きな息をしながら入ってきた。案内状には駅から徒歩5分と書かれていた。まだまだ現役時代であれば目をつぶっても行けた場所が、周辺の環境変化でまるで別の場所となっている。再開発のスピードすさまじいものがある。10年ぶりに行くともまるで初めて訪れる旅行先のような感じがする。私はいつも煙草を買っていた路地裏のタバコ屋で、虎ノ門の駅はどう行けばよいか、と聞いた。あそこのローソンの看板があるところを右に行けばあるよ、と教えてくれた。そのあたりまで歩いてゆくと、少しは昔の雰囲気が残っていた。

一人遅れてきた仲間は「駅から5分と思って歩いてきたらまるで訳が分からなくなり1時間もかかるとはねー」と言っていすに座り込んでしまった。

挨拶が何となく再開された。

プラスチック循環利用協会の専務理事の挨拶が継続された。この協会はプラスチックの廃棄物問題に対処している業界団体である。だからプラスチック廃棄物の現状についての御話があった。ごみ問題は変わらず難問題である。今一番の問題は海洋汚染だという。経産省内部でも、日本のみならず世界的に大きな問題として取り上げられている、とのこと。

高度成長時代にも似たような問題があった。プラスチックのペレットが海岸の砂浜に漂着していて問題になったことがあった。漂着ペレットの環境破壊が解決策を求められた。当時はペレットが工場、倉庫の清掃時などに流されたものと推定し、企業、工場からの排水溝出口のマニュアルをつくり徹底を図ったことがあった。

勿論、海外で廃棄された成型品も多数あった。現状は輪をかけて数量も多くなってきているようである。これらが海をさまよい波にあらわれ、岩にあたりミクロな微粒体になって環境に影響を与えているようである。成型品が年月を経て微粒体になっているから厄介なことだ。全世界で700万トン～800万トンものプラスチック、もしくは微粒体が漂流しているらしい。

プラスチック成型品による海洋汚染、プラスチックの漂流問題は近年海外の経済成長もあり日本の海岸を取り巻く、アメリカ、オーストラリアのみならず、東南アジア諸国まで環太平洋での取り組みとならないといけない。

廃プラ諸問題の解決のため、プラスチック循環利用協会では米国、欧州、豪州などとのグローバル委員会を30数年も前から、先進国のみで開催してきたが昨今のプラスチック海洋漂着の難題解決には東南アジアの多数の国からの参加が求められるに違いない。

対処方法は、廃棄プラスチックは資源として再利用する方法を技術開発することにある。私は廃プラを熱分解し油化し、エネルギー化をリコmendしてきた。マテリアルリサイクルでもよいが、プラスチックはその種類によって再利用の方法を選択することが必要である。プラスチックをよく知り、その特性を判っている人が再利用方法を検討すべきである。何に再利用したらよいかをよく知っている人が先導すべきである。とはいえ、政策的課題もあるだろう。いずれにしても、廃棄物は宝物である。とくにプラスチックは人類の文化向上に貢献し、その廃棄物は再利用でまた世の中に社会貢献する。ゴミはゴミのままでは宝物にならない。

(NPOバイオものづくり中部 環境分科会主宰 豊島 紀彦)